

〈高校生の部 佳作〉

看護体験

福井県立武生東高等学校 砂田 一真莉

八月の頭、私は県内のある病院に看護体験をしに行った。県内の高校生が集まり、振り分けられた病棟で三時間ほど看護体験をするという内容だった。見学をする病棟は、自分たちで選べないし、希望も出せない。私は助産師を志望しているから、産婦人科を見学できたらしいな、と軽く考えていた。

当日、集合場所に着き、担当の看護師さんが迎えに来るのを待つ。私は結構最後の方に呼ばれた。案内役の看護師さんに「はい。あなたはPCUね。」ぼん、と肩を叩かれる。皆さんPCUって知っていますか？ 私はこのとき、集中治療室のICUと勘違いしていました。そのまま担当の看護師さんに引き渡される。「一緒に見学する予定だった子は急遽休みになったから、看護師長さんと二人で病棟内を回ってね。」……今までいろいろなサイトを漁って看護師について調べてきたけれど、百発百中と言っていていくらい、看護師は性格が悪いとか、怖い人が多いと書いてあることが多い。実は私の母親も看護師なのだが、白衣の天使とは言い難い、悪魔のような性格をしている。だから今回の担当の看護師さんが怖い人だったらどうしよう、ととても心配していた。とてもじゃないけど三時間も、しかも二人きりなんて耐えられない。そんな心配とは裏腹に、私を待っていたのは、丸い眼鏡をかけた、図書館の司書さんにいそうな雰囲気の方だった。よかった……。そつと胸を撫で下ろす。「緩和ケア病棟の看護師長です。緩和ケア病棟は、これ以上の治療の継続が難しくなった患者さんの心身のケアを行うところです。ほとんどの方ががん患者やね。ちなみにどこ志望でした？」私が助産師志望です、とこたえると、「あー助産師。いいですよ。今回行く緩和ケア病棟は、言ってしまうえば真逆のところですね。」思わず苦笑し、心の中で確かにそうだなと思った。頭の中で、二つを並べてみる。簡単に言えば、人生の始まりの産婦人科と、人生の最後を過ごす緩和ケア病棟。緩和ケア病棟にはあまりなじみがないけれど、なんとなく暗いイメージがあった。

緩和ケア病棟は二階の端の方にあり、なんだか他の病棟とは違う、独特な雰囲気がある気がした。病院の内装は全体的に白かったが、緩和ケア病棟は温かみのある茶色がベースになっていた。看護師長さん曰く、なるべく家と同じ雰囲気にしているそうだ。たしかに、入口

のホールには三つの丸テーブルとそれぞれにかけられた椅子、さらにはキッチンがあった。そこだけ見たら病院とは気づけないと思う。患者さんの病室に案内される。患者さんはさまざま、ずっと看護師長さんとおしゃべりする方がいれば、看護師長さんが体温の測定を促してもあまり反応がなく、目を瞑ったまま動きたがらない方もいた。ここで少し驚いたのが、看護師長さんは無理やり体温を測ろうとしなかったのだ。「じゃあ後からまた来ますね。」と優しく声をかけた上に「この前頭を壁にぶつけていたのでクッションを敷いておきますね。」と細かい気配りまでしていた。私になりたいのは、まさにこういう看護師さんだと、その光景を見ながら切に思った。臨機応変に、柔軟なものごとを考え、患者さん優先で行動する。この前に行われた看護講演会で、ある方が、「看護師や助産師はあくまでサポート役。看護の主役は患者さんだ。」とおっしゃられていた。あれはこういうことだったんだな、と本物の看護の前に、改めて理解することができた。

そのあと、実際に私も特浴という、ベッドのような形のお風呂を使ってする入浴を手伝わせていただいた。さっき学んだことを活かせるように患者さんの様子をうかがいながら洗った。患者さんは、あー、と目をつむりながら気持ちよさそうに声をもらしていた。将来、あの看護師長さんのような働き手になっているといいな、と患者さんの腕を洗いながら思った。